

Junior Message Bunko 3

泣いてもいいよ!

涙は天使の贈り物

倉橋燿子

Kurahashi Yoko



ポプラ社

ige Bunko 3

泣いてもいいよ!

涙は天使の贈り物

倉橋燿子

Kurahashi Yoko



ジュニア メッセージ文庫

3

泣いてもいいよ！
[涙は天使の贈り物]

1993年12月 第1刷発行

Junior Message Bunko 3

●著者 倉橋燿子

●発行者 田中治夫

●発行所 株式会社ポプラ社

電話 (営業) 03-3357-2211 (編集) 03-3357-2216

FAX 03-3924-5341

振替 東京 4-149271

●編集担当 牧野久美子

●印刷・製本所 図書印刷株式会社

©倉橋燿子

ISBN4-591-03158-6

N.D.C.159/158p/20cm

落丁本・乱丁本は送料小社負担でとりかえいたします。
ご面倒でも小社営業部宛お送りください。

「大丈夫。^{だいじょうぶ}

きつとうまくいくー

C ONTENTS

Junior Message Bunko——3

泣いてもいいよー

涙は天使の贈り物

『天使の涙』
なみだ

はじめに… 6

『夢見る涙』

夢見ることから、すべてははじまる 20

『恋する涙』

恋することはステキな冒険 ぼうけん 43

『キレイの涙』

コンプレックスこそキレイの素^{もと}

69

『元気の涙』

だれだってきらわれたくなんかないっ！

94

『勇気の涙』

はじかいてごらんよ

119

『輝^{かがや}く涙』

今しかないんだよ

139

あとがき

157

著者紹介

「倉橋耀子くらはし ようこ」

広島県生まれ。さそり座、O型。上智大学文学部卒業後、女性誌の編集者となる。ライター、「マーシャルのコピ」ライターを経て作家デビュー。現在、小説だけでなく、まんがの原作等でも活躍中。著書に「風を追うるべに」、「さようなら、こんには」、「女ともたち」、「ラストシーン」等のシリーズ、他多数ある。

▲
[装丁・デザイン 前嶋昭人]
[表紙・イラスト めぐろみよ]



*Junior
Message Bunko 3*

泣いてもいいよ！

涙は天使の贈り物

倉橋燿子
Kurahashi Yoko

『天使の涙』なみだ はじめに…

どうして涙がでるんだろ。

嬉しかったり、悲しかったり、淋しかったり、せひなかったり……。

知らないうちから、涙がでてる。

どうしてんだろ。

それでも、泣かないで。

いろんな思いがおおきくなるまで、言葉のかたまりで涙になる。

メロメロしたうちはないから、

泣き止む理由はない。

だが、泣きたがる。

「天使の涙」はじめてに…



涙は素敵なうていへ。天使からのメッセージ。

思わぬにほした涙の意味を、

知るもにひいた心の道^{みち}を、

そしう道^{みち}に道^{みち}つるん、

しぬにほせしう、ひ、キリーな涙を、ながはしたのうていへ。

だから。

泣いてるこころ。

かわいくなかにあなは。

こしきもぬるこころかなの……。

大丈夫。

おしひ、いそぐこころ。

いなかのね——。

正直いって、私は泣き虫だ。自分でもなさけなくなるほど涙なみだもろい。こんな私が、以前『風を道しるべに…』（X文庫・講談社）という作品を書いた時、読者の方から、「ティッシュ片手に読みました」というおたよりをたくさんいただいた。ところがほかならぬ書いた本人の私が、ティッシュどころかタオル片手に書いたのだから、あきれてしまう。

大体、自分で考え、自分で物語を展開てんかいさせているのに、どうしても自分が泣いてしまうんだろう。

しかも時には、本気でオイオイ声をあげて泣いていたのだから、バカみたいだ。

人々のわらい者になるピエロは、きつとほんとうにはわらっていないような気がする。あのユニークな化粧けしょうの下で、お客さんの反応はんのう

を冷静に見つめ、自分がなすべきことをたえず考えているのだと思う。それがプロというものなのだ。

それなのに、私ときたら、真夜中、ひとり原稿用紙の前で孤独に
もりあがってしまう。

自分の作品でさえこんな調子なのだから、他人様の書かれたもの
には、どれだけ泣かされたかわからない。

ある時、十巻とか十五巻という長編のまんがを、いつきにどんと
買いこんできて、それをひと晩で読みあげたあげくに、つぎの日は
一日中泣いていたということもあった。

またある時は、テレビのニュースで観た戦争地の子どもたちの明
るいむじやきな笑顔を、思いだしては何日も涙ぐむ。

それほどしたしくもなかった近所の人びとがひっこすことになり、さ
つてゆくうしろ姿を見ているだけで、もう涙……。

もしかしたら私の涙腺は異常なのではないだろうか。本気で不安

になつてしまふ。

それにつけても思うのは、私の家族のこと。

広島県に住む私の家族は、一家全員、そろいもそろって涙もろい。いや涙もろいだけでなく、喜怒哀楽の感情表現がととてもとてもはげしい。

喜ぶ時には、それこそ家をあげて「ばんざい」の大合唱であるし、おこるときなど、たがいのことを「ブタ」だの「イノシシ」だのとのしりあい、時にはプロレスまがいのつかみあいにもで発展することだつてある。

私は以前、このような單純ではげしい感情のあらわし方を嫌悪した。芝居がかつていふと思ひ、自分にもながれてゐるはずの血をのろいもした。

クールに生きたい！　そうつよく願つた。

せめて私ぐらひは、冷静沈着にものごとを見つめよう。嬉しい時

にはかすかに微笑^{ほほえ}み、はらがたつ時にはゴクリと怒^{いか}りをのみこもう。そしていつもおだやかに、淡々^{たんたん}と日々をすごすのだと心にちかった。

けれどそれを実行するのは、ほんとうにたいへんだった。

いいことがあると「やったね!」ときけび、すぐにだれかに知らせたくなるし、怒りをおさえこむのは七転八倒^{しちてんぱうとう}の苦しみだった。

ましてや悲しい時など、地の底までしずみこむ気分をひきあげるために、さんざん衝動^{しょうどう}買いにはしったりもし、むだなお金をつかうハメになってしまった。

クールというのはむずかしい。

ところが、いつしか私はとてもべんりな言葉にめぐりあった。

「べつに……」

このひとことだった。

この言葉の下には、「べつにたいしたことじゃない」とか、「べつにどうでもいい」とか、そういった意味のフレーズが省略^{しょうりゃく}されてい

るのだと思うけれど、とにかくとても役にたつひとことだった。

嬉しい時も悲しい時も、嵐あらしのような怒りいかに身体をふるわせる時も、

「べつに……」

とひとことつぶやくと、なんとなくほんとにどうでもいいような気分になってしまいうから不思議だ。

だから、ひところの私は、口ぐせのようにこの言葉を多用した。

「きいたわよ。たいへんだったんですってね」

「べつに……」

「すごいじゃない。やったじゃないの」

「べつに……」

「ゆるせないと思わない!? ひどい話よね」

「べつに……」

こんなぐあいに、ひとつおぼえの呪文じゅもんのように、私はくりかえす。こうして私は、夢にまで見た「クール」がだんだん板についてく

るのを感じ、ひそかに満足をおぼえていた。

感情のゆれも、気がつけばごくわずかになり、あう人によつては、私のことを、＼もの静かなおとなしい人＼という印象さえもつほどになつた。

けれども、それに比例して、私には意欲というものもいちじるしくうせていった。

何をするのもめんどくさくなり、何をする気もおこらなくなり、ひどい時には、朝おきることさえいやになつてしまう。

本を読んだり、友だちと話したりしても、「べつに……」と思つた瞬間、すべては灰色の空気の中にとけてゆき、身体ぜんたいが灰色にそまつてしまったような気がした。灰色とは、つまり色のない世界のこと。

これではもう「クール」というより「氷の世界」だ。

心の奥そこに、チリのような雪がふりつもり、それがガチガチに